

近世社会の解体を考える

吉岡 拓

戦後の明治維新史研究は、明治維新を封建制から絶対主義へ移行する画期と捉えるマルクス主義講座派的理解を前提に、その変革を担った主体の動向を解き明かす作業に注力していた。しかし、1970年代に入ると、研究の主流は政治史（政局史）へと移る。その結果、明治維新史研究は、次第に社会構造の変化という点への関心を喪失していった。本報告では、かかる研究潮流に対するささやかな抵抗として、近年研究の進展著しい近世身分制研究の知見に学びながら、京都近郊の村落地域（丹波国桑田郡山国郷）を事例に、近世社会が解体していく様の一端を描き出すことを試みた。

山国郷では、17世紀中より、大堰川から獲れる鮎を朝廷へ献上していた。名主（みょうしゅ）と呼ばれるこの地域の有力百姓達は、献上の独占（その表裏としての鮎の漁業権の独占）を企図したものの、18世紀中頃までは、その目的を果たせなかった。

変化が生じたのは、寛政年間である。この時期に起こった鮎献上をめぐる名主と平百姓の争論の結果、鮎献上は「名主」身分固有の特権として、京都代官所から公認された。ただし、京都代官所から「名主」身分として認められたのは、山国郷の中で禁裏御料だった村々に居住していた有力百姓だけであった。これにより、名主集団は、京都代官所から公認された「名主」身分の集団と、本来名主でありながら京都代官所からは身分的公認を得られなかった、禁裏御料以外の村々に居住する名主集団とに分化する。前者には、名主の居住していない村の住民で、その村が禁裏御料であったがゆえに、便宜上歎願書に名前を連ねた者も含まれていた。

19世紀に入ると、大堰川上流域に位置する山国郷で鮎を獲るのは困難になる。その結果、鮎献上に付随する商業的なメリットは失われ、献上は「名主」という身分を維持するためだけの行為へと変容する。「名主」身分の者達は、下流域の村から鮎を購入するなどして、天皇への鮎献上の継続を図った。それだけ、彼らにとって「名主」身分であることは重要な意味を持つものだったのである。

しかし、天皇・朝廷の側からすれば、献上者が誰であろうと、一定量の鮎さえ確保できれば良い。そのため、「名主」身分の者達から献上される鮎の量が減少してくると、天皇・朝廷は、「名主」身分ではない平百姓にも、鮎献上を要求するようになる。これは、当該地域からの朝廷への鮎献上を「名主」身分固有の特権として位置づけた京都代官所の方針からはあきらかに逸脱する行為であったが、朝廷側にそのことを気にしている様子はない。献上を要求された平百姓達もまた、「名主」身分への対抗意識から、要求に積極的に応じた。鮎を求める天皇・朝廷の動きは、多様な集団が天皇・朝廷に接近する機会をもたらし、そしてそのことが、結果として「名主」身分の者達の地域内での特権的な地位を脅かすこととなったのである。

幕末の文久期に入ると、幕府による天皇陵墓の修復保存事業が開始する。陵墓の現地管理者として守戸（しゅこ）が設置され、山国郷内に所在した光厳・後花園・後土御門天皇の陵墓にも、慶応3年（1867）5月までに計12名の郷内住民が守戸に就任した。問題は、この守戸が士分であることと、

守戸に就任した者のうちの7名が平百姓であったことである。幕末の政治社会状況が、名主・「名主」身分を超える存在を山国郷内に出現させたのであった。

「名主」身分の者、そして禁裏御料の住民ではなかったがゆえに寛政期の争論で「名主」身分とはなれなかった名主達は、この守戸に対抗するため、郷の鎮守である山国神社の社司（士分）になることを目指す。さらに、慶応4年（1868）1月3日、鳥羽伏見の戦いが始まり、5日夕方に山陰道鎮撫隊（総督：西園寺公望）が丹波方面へ出陣してくると、名主達は「禁庭江隨身」（皇学館大学所蔵山国隊関係史料）を目論んだ。かかる彼らの目論見は、最終的には郷内住民で農兵隊を結成し、戊辰戦争に官軍側として参戦する、という形で実現する。農兵隊には名主のほか、平百姓も参加した。名主達が、出征からの帰郷後に名主へ取り立てることを提案し、平百姓達を勧誘した結果であった。

以上に見てきたことを、一般化しつつまとめよう。

近世社会とは、社会集団（共同組織）の重層と複合によって構成される（塚田孝『近世日本身分制の研究』兵庫部落問題研究所、1987年、356頁）。そして、身分とは、個人ではなく、この集団に対して支配権力により付与されていく（より正確に言うと、集団の特権要求に権力側が応じる）のであるが、重要なのは、集団は決して固定的なものではなく、近世社会の展開の中で絶えず分化・拡大していく、ということである。本報告の事例でいえば、名主という集団が、寛政期の争論の結果、「名主」身分の集団とそうではない集団に分化したことなどが、その典型である。

集団の分化・拡大は、多くの場合、新たな特権＝身分を獲得しようという活動の結果として生じる。身分の否定ではなく、新たな身分を獲得しようとした活動である以上、集団の分化・拡大それ自体は、近世身分制社会の論理に極めて適合的なものである。しかし、にもかかわらず、集団の分化・拡大は、結果として、近世地域社会の内部に存在していた身分秩序を、動揺・解体させる。名主の山国郷内での地位を維持するための活動の帰結である農兵隊の結成が、平百姓をその内部に迎え入れたことにより、かえって名主と平百姓の別を曖昧にしてしまったのは、そのことの象徴といえよう。

地域社会における近世の解体は、政治社会内の動向に一定程度規定されつつ、「身分上昇」という身分制社会に特有の願望の追求を各集団が行った結果として、自律的にもたらされるのである。